

□防災まちづくり大賞 10 年を振り返って

消防研究センター 所長 室 崎 益 輝

## はじめに

阪神・淡路大震災はその尊い犠牲を糧として、わが国に貴重な防災のシステムをつくりだした。その代表例が、表彰制度としての「防災まちづくり大賞」である。このまちづくり大賞の 10 年の歴史を振り返ると、防災まちづくり大賞という制度とそこで表彰された団体の活動内容が、日本の防災まちづくりに与えた影響は極めて大きく、安全安心社会形成の先導的な役割を果たしたと、評価することができる。そこで、節目としての 10 回目の表彰を機に、その目的や成果を再整理して、次の 10 年を展望することにした。

## 阪神・淡路大震災が投げかけた課題

上述したように、この防災まちづくり大賞は、阪神・淡路大震災を契機として設置された。それゆえ、その目的や意義を大震災の体験や教訓と切り離して語ることはできない。そこでまず、大震災が防災対策やまちづくりに問いかけた課題を整理しておきたい。

さて、その課題をキーワードで表現すると、日常性、総合性、内発性、地域性そして連携性の 5 つに要約される。

日常性というのは、日常から持続的に防災の備えあるいは体質の改善をはからなければならない、ということである。住宅の耐震補強や家具の転倒防止など、事前の持続的な取り組みを重視しなければならない。総合性というのは、ソフトウェアだけではなくヒューマンウェアやハードウェアをも包含した取り組みが期待される、ということである。維持管理や助け合いも大切であるが、それ以上に都市や住宅の構造を強化することが求められる。内発性というのは、市民が自発的あるいは主体的に取り組まなければならない、ということである。公助だけではなく自助が、またトップダウンよりもボトムアップが欠かせないのである。地域性というのは、地域の実態に即し地域の資源を生かして取り組まなければならない、ということである。ここでは、DIG(地図を用いた図上訓練)や防災マップづくりなどの地域密着型の活動が期待される。最後の連携性というのは、多様な担い手が連携し協働して取り組まなければならない、という

ことである。ボランティアとの連携はいうまでもなく、企業や学校などの参画や専門家やメディアなどの協力が欠かせないのである。

## まちづくり先進事例の評価と発信

阪神・淡路大震災以降、こうした課題に包括的に応えるということで、防災につながる取り組み、まちに密着した取り組み、手づくりの取り組みが重視されるようになり、それが「防災まちづくり」として結実していくことになる。防災まちづくり大賞は、こうした背景のなかで、その先駆的な活動を見いだして表彰し、その活動経験を全国に広めることを企図して設置されたのである。この防災まちづくり大賞の主催団体においては、第1回以来継続して、選に漏れた事例も含めて「事例集」を編纂し、それを全国の自治体や市民団体に配布普及してきているが、これは全国に先進事例を広めたいとの熱い思いからである。なお、先に述べた「震災の教訓5つの課題」は、防災まちづくり大賞の選考基準や選考対象にしっかりと反映させられている。選考基準をみると、「日常生活への定着」ということで日常性あるいは継続性が、「地域特性を配慮」あるいは「コミュニティ形成への貢献」ということで地域性が、「自発性、自主性」ということで内発性が、「行政、住民、団体、企業の連携」ということで連携性が、位置づけられている。他の一つの総合性は、選考の対象として、ハードウェアとしてのものづくり、ソフトウェアとしてのことづくり、ヒューマ

ンウェアとしてのひとつづくりの3つを設定することによって、位置づけられている。こうしてみるとまさに、阪神・淡路大震災の教訓を生かそうとして、防災まちづくり大賞が生まれたことが理解していただけたと思う。

## 防災まちづくりの原型とその波及

第1回から第10回までで、100を超える事例が大賞を受賞している。いずれも、激戦を勝ち抜いて受賞した事例だけに、地域の防災に大きく貢献したものであり、全国にまちづくりの豊かな教訓を発信したものと、高く評価している。その中から、特に印象に残った事例を中心に、防災まちづくり大賞の歴史を概観しておきたい。

第1回で、墨田区の一寺言問の防災まちづくり、国分寺市の市民防災まちづくり学校、京都の春日学区の福祉のまちづくりが、受賞した。この3つの事例は、大震災の何年も前から先駆的に防災まちづくり活動を展開していた「草創期の御三家」ともいえるべき優れた事例である。一寺言問はハードウェア、国分寺はヒューマンウェア、春日学区はソフトウェアを代表する、評価すべき超一級の事例として選ばれている。最初にこの3つが選ばれたことが、その後の防災まちづくり大賞の品格と権威を高めるに役立ったと、思っている。いずれにしても、その後の受賞事例をみると、この3つが手本となっているものが少なくなく、防災まちづくりの原型といってよい。

例えば、一寺言問の活動は神戸市長田区

の御蔵まちづくりなどに、国分寺の活動は春日井市の安全アカデミーなどに、春日学区の活動は坂戸市の鶴舞自治会などに受け継がれている。

第3回で駒ヶ岳火山防災会議協議会が受賞した。ハザードマップを軸とした防災活動の先駆的な事例で、一寺言問や春日学区よりもはるか前、国分寺とはほぼ同時期から防災に取り組んできた事例である。この歴史ある先駆的な事例ということでは、第5回の丸の内地区の三菱地所、第7回の京都の清水寺自警団を見落とすことはできない。私は、この駒ヶ岳と丸の内と清水寺を「草創期の裏御三家」と位置づけている。というのは、地道な取り組みで派手さはないが、先見性に富んだ取り組みを持続的に展開してきたという点で、高く評価されるからである。ハザードマップに取り組んだ駒ヶ岳は、防災マップやDIGのとりくみの源流であり、丸の内地区における三菱地所は、企業の地域貢献やまちづくり参加の源流であり、文化遺産を守る清水寺自警団は、文化財防災あるいは伝統的街並み防災の源流であるからである。こうした何十年もの歴史がある先駆的な事例であっても、受賞するのに数年の歳月がかかっている。また、まだ陽のあたらないう隠れた事例が全国にはあることを、肝に銘じて選考にあたりたいと思う。そういえば、飛騨高山や神戸真野の防災まちづくりなどは、全国への影響力をもちながらも、なぜかまだ受賞していない。

## 防災まちづくりのニューウェーブ

防災まちづくり大賞の受賞事例をみると、ニューウェーブというべき新しい取り組みが、回を重ねるごとに増えてきている。その新しい取り組みを整理すると、「防災の担い手のひろがりを感じさせる事例」と「防災の課題のひろがりを感じさせる事例」に大別される。担い手のひろがりでは、NPOなどボランティアの取り組み、企業や商店街などの企業の取り組み、小学生から大学生までの若者の取り組み、メディアや研究者などの専門家集団の取り組み、ニュータウンやマンションなどの新興団地などの取り組みなどを、指摘することができる。ボランティアの取り組みでは、東京消防庁災害時支援ボランティアや災害ボランティア推進委員会などの事例、企業の取り組みでは、早稲田商店会や横須賀ガソリンスタンドなどの事例が印象に残っている。若者の取り組みは、枚挙に暇がない。

小学生では高知の大津小学校や豊橋の津田小学校。中学生では世田谷区の太子堂中学校や宮城県の松島町、高校生では名古屋の高校生防災お助け隊、大学生では北九州市立大学や国際ボランティア学生協会など、優れたものが多い。メディアでは、静岡新聞や毎日放送さらにはNHK神戸放送局などの活動がある。いずれもメディアとしての防災責任を一過性に陥ることなく持続的に追求し続けていることが評価されている。研究者などの専門家が参画した優れた取り組みとしては、東京都の震災サバイバルキャンプや青森県の外国人向け日本語マニュアルなどがある。

課題のひろがりでは、家具の転倒防止や住宅の耐震補強など物的減災の取り組み、防災教材づくりや防災イベント上演など教育啓発の取り組み、避難路や避難ビルなどの防災施設づくりの取り組み、要援護者支援や情報伝達システムなどネットワーク構築の取り組みなどを、指摘することができる。物的減災では、ひらつか防災まちづくりの会の耐震補強、岐阜県恵那市や江東区白髭東自治会の家具転倒防止の取り組みが、評価できる。教育啓発では、黒部市の防災寸劇や岐阜県の上宝村の副読本づくりさらには富士宮市の人形劇プロジェクトなどがある。防災施設づくりでは、三重県の紀勢町の津波タワーづくりや和歌山県串本町の津波避難路づくりなどを指摘することができる。そのほか、まだまだ素晴らしい取り組みが無数にあるが、紙面の都合もあり残念ながらここでは紹介しきれない。

#### 次の10年への期待…花を咲かせる段階に

この10年で大賞は、先進事例を発掘し発進する表彰制度として、無くてはならない全国版の「ことづくり」として、大きく離陸したといつてよい。とはいえ、それがまだ「種をまいた段階」に止まっていることも確かである。その種が花となり果実となるまでには、さらなる努力を積み重ねることが欠かせない。継続は力だという信念のもとに、「花を咲かせる段階」を目標に取り組んでいこうと思う。

ということで、次の10年に向けて花を咲かせるための課題を、思いつくままに列挙

しておきたい。その課題を一言でいうならば、それは「空間的なひろがり」であり「時間的なつながり」であり「人間的なふかまり」である、ということになる。

空間的なひろがりというのは、全国すべての地域に防災文化の花を咲かせる、ということである。大賞への応募やそれによる受賞が全国的に広がるということもあるが、応募や受賞さらには発信というプロセスを通じて、防災まちづくりの活動が津々浦々に燈原の火のように広がることを期待している。この場合、大賞の選考や評価にあたっては、新規性や先進性がなくとも実効性や努力性があるものを、拾いあげることが欠かせない。仮に、それがコピーであり二番煎じであっても、それは防災まちづくりの文化の波及と定着という面からは、評価すべきものだからである。華々しい活動よりも地道な活動にもっと陽をあてることが、これからは必要と思っている。

時間的なつながりというのは、第1に防災まちづくりの活動を持続させ定着させる、ということである。第2に減災の時間サイクルを意識して予防にも力を入れる、ということでもある。前者の持続性ということでは、地域コミュニティの防災に関わる伝統行事や生活慣習などを発掘することにも、これからは心がけたいと思う。また、過去に大賞を受賞したものであっても、持続性のレベルの高いものについては、再度表彰することがあってもよいと思う。後者の予防性ということでは、次の災害に備えるための予防的な活動を、これからはより積極的に評価していきたい、と考えている。ここでは、住宅の耐震補強や家具の転倒防止など

の予防的文化の花が咲くことを期待している。

人間的なふかまりというのは、防災の担い手としての人間の防災力の向上を総合的にはかかっていく、ということである。この防災力のなかでは、防災意識の啓発と向上はとくに大切である。通り一遍の防災教育では、防災知識は深められても防災意識を掘り起こすことは難しいからである。ところでこの防災意識は、非常時の災害体験はも

とより日常時の生活体験やヒューマンリレーションの中で形成されている。それだけに、福祉活動への参加や体験訓練への参加さらには世代間あるいは異分野の交流などを軸とした、地域レベルにおける新しいひとづくりの展開に期待している。世代間の交流ということでは、小学生などの若者を軸とした活動が、異分野の交流ということでは、メディアや専門家が参画した活動が、これからはより重要になってくるものと思う。